
愛憎ジャンキー

とどこ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛憎ジャンキー

【Nコード】

N6972H

【作者名】

ともこ。

【あらすじ】

私の最期。最期のはじまり。ただの女が白いクスリと歪んだ愛に出会い段々と溺れていく物語。

【1】（前書き）

この小説には違法薬物を肯定的に表現している部分がありますが、登場人物の心情などの表現であり、違法薬物の使用を推奨するものではありません。

【1】

――。

目が覚めた。

この部屋にはカーテンがない。

すぐ横の大きな窓からはさんと日が射していてすごく眩しかった。

ずいぶんと眠っていたらしく頭が痛い。

(…今、何時だろう?)

枕元にある携帯に手を伸ばした。

(……あれ?)

ない。

あるはずの携帯電話はそこになくて、焦って体を起こすとそこは私の部屋じゃなかった。

見渡すとそこはかなり広い部屋のようだった。

といつても家賃8万の私の部屋よりもかなり広いつてだけで正確な広さはわからなかったのだけど。

この部屋の特徴は広いのもう一つ、真っ白な部屋だった。

真っ白な壁に真っ白なベッド。

窓はなくてどうやらこの白が眩しかったらしい。

向こうの方には白い扉が2つ、あった。

あと、なんだろう？

あれはスピーカー…？

『ジジ…××××××！！』

(！?)

—————

目が覚めると、私の部屋だった。

たった6畳でいろんなものが散乱している。
私の部屋だった。

ゆっくりと深呼吸をして夢の内容を思い出す。

最近よくみるあの夢だ。

あの夢を見た朝はなぜか酷く疲れてしまう。よかった、たしか今日は仕事が休みだ。

カーテンを開けて音楽をかける。

ゆるい日差しに名前を知らない陽気なジャズは不思議と似合っていて好きだ。男からは古くさいと言われるがやはり音楽はレコードが良いよ。

フローリングに直に寝ていた私は、軋む腰を擦りながら歩いて6歩の台所に向かった。

あ。

いけね、片付けなきゃ。

台所にあったのは
倒れたコップ、ぶち撒かれた水、白い…錠剤。

最近出会ったそのクスリは私を楽園に連れていってくれた。

クスリをくれた男は確かキャンディって呼んだ。即効性が高くて幻覚と浮遊感がある。

はじめは
キャンディ食べる？って、まんまと騙されて、だけど今じゃ常習犯だ。

依存性もかなり強いんじゃないかな。

【2】

私と彼が出会ったのはいつ頃だったかな。

確か私は22歳で、通い始めたばかりのハプニングバーでお酒を飲んでたんだ。

ハプニングバーっていうのはHなハプニングのある…カップルから3Pに誘われたりノーマルにSMやセックスに誘われたりするとこ。誘いを断ったり、行為をせずに1人でいてもいいし（現に私はここで行為をしたことはなかった）、結構自由な場所。

ハプニングバーって場所をはじめてのときはどきどきしたけど、だんだんと知り合いが増えたり、スタッフと顔馴染みになったりしてすごく居心地のいい場所になっていて、その日もステージの緊縛シヨールを鑑賞しながら1人でひたすらモスコミュールをあおいでた。

「隣、いい？」

『…どうぞ。』

知らない男が話し掛けてきたときは、私は前を見たままで答えることにしていた。

話し掛けてくる男の数は多いからいちいち相手になんかしてられない。

「よく、ここに来てるよね？」

今日は少しが機嫌悪いから少し無愛想な風かもしれない。

『…うん。』

こうして真正面を見ていれば男の表情はわからないけどきょとんとした顔をしているのはなんとなくわかった。

「…あははっ…つれないなあ。

おじさん切なくなっちゃうな」

『そんなっ……』

その声や話し方の若々しさとおじさんって一人称のおかしさに突っ込みたくて思わず彼の方を向いてしまった。

（ああ、いけない、やられた。）

私は即座に思った。

（目を、目をそらさなきゃ）

思ったけど私は動けなかった。

ひきつけられて固まってしまった。

彼は知っていたのだ、その言葉で私が振り向くことを。

そんなわけではないのだが、私が振り向いた瞬間の彼の笑みは、

今でも私が好きな最上級のほほ笑みであり、待ち構えていたかのような、しかし温かみを伴った不思議な雰囲気をもとっていたからその時の私はそうと信じて疑わなかった。

『…………。』

「どうしたの？」

彼は表情を崩しカウンターに向きなおした。

私も少し落ち着いて表情を直した。まだ心臓は高鳴りを続けていたけれど興味に負けてもう一度彼を見た。

彼は決して一般的にいい男ではなかった。

おじさんと言うほどの年でもなく、20代ほどだったが、黒い髪は長く、鋭い目は印象的だった。

色白で、スーツを着ていてもわかるほどのすらりとした体軀はどこかひょうひょうとした風であった。

「なにか俺の顔についてる？」

ほほ笑みながら聞いてくる男にほほ笑みながら返してあげる。

『んーん。なにも？
ただ、面白い男だなあと思って。
なぜか素直に言ってしまった。』

男はまたきょんととして、それから笑いながら言った。
「かわいい子にいい男って言われるとなんだかうれしいね」

『いい男とは言っていないよ？』

冗談めいた会話に少し余裕が出てきたことを感じた。

「ははっ、俺はユウ、優しいのユウ。よろしく」

勝手に自己紹介されてしまった。
正直、嫌じゃなかった。

—————

それから3時間もの間私とユウはたくさん話をした。
セックスの事も話したし、お酒の話もした。

驚いたのは音楽とか映画の趣味が合うこと。でも彼のほうがかなり
詳しいことも知った。

話が楽しすぎて他の人のことはあんまり見ていなかった。

私が眠くなって帰るまでほんとにたくさん話をしてくれた。

ユウはその外見からは想像もつかないくらい砕けていて、だけど大
人の常識とか知性を持ってる人だった。

帰りぎわにユウはさらさらと自分のメールアドレスを紙ナプキンに書いてくれた。

送っていくと言われたがなんとなく断って1人で帰ってきた。

もっと話したかったけど今日の出来事を寝る前に思い出したかった。きっと家に着いたらすぐに寝てしまうから、ユウのことを思い出したかったから。

それじゃと言ってあげた彼の指の細さは少し不気味な位であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6972h/>

愛憎ジャンキー

2010年10月9日18時31分発行